

へき地は告発する

すずらん給食とその後

毎日新聞社会部記者 前野和久 著



へき地は告発する

すずらん給食とその後

前野 和久

野火書房

著者略歴

- 1939年 横浜市に生まれる。
1963年 春、東京教育大学文学部言語学専攻
を卒業、毎日新聞東京本社に入り、
盛岡支局に赴任。
1964年 東京大学新聞研究所を修了。
1968年 毎日新聞東京本社社会部に転勤、現
在に至る。
住 所 横浜市旭区鶴ヶ峰 1 の87の4

僻地は告発する

1970年	12月	20日	初版発行
1971年	4月	10日	改訂第1版発行
著者	前	野	和久
印刷所	桜	井	広済堂
発行者	佐	藤	寿男
発行所	野	火	書房

東京都千代田区猿楽町2-4-2
小黒ビル内
TEL. 03(291)0056 振替・東京96955

乱丁・落丁本はお取りかえいたします

定価620円



朝日に樹氷がキラキラ光る
白樺林を学校に急ぐ
ガンバレ雪ン子
(葛巻町毛頭沢分校付近)



前の夜 一生けんめい独習した
ドラムのたたき方を子供たち
に教えるオカバ先生
(岩泉町安家小、岩本分校)



キミは国語 キミは算数
1年生から6年生までも ひとりの
代用教員が教える冬季分校
(沢内村 高畑冬季分校)



ウントロント
一かん50キロ以上の原乳を
登校するさい集乳所まで運ぶ
(滝沢村一本木原)



さあスラン摘んで給食だ、
鰯川の山の子たちは、ヤブウダイ
スを聞きながら無心につんだ。
(40年6月、鰯川の沢で)
(盛岡正C提供)



スズランの花を胸に、佐藤
首相を迎える荻川の子らの
顔にも、やっと喜びの色が……
(40年6月、花巻空港で)
(盛岡LC提供)



完全給食を実施して
腹ペコの子らを救ってくださいと
盛岡ライオンズクラブの今野会長
(玉山村 荻川小で)

本書を推薦する

私は、東京ライオンズ・クラブに属するメンバーである。

ライオンズ・クラブはたんなる社交団体ではなく、ウィーサーブ(We Serve)をモットーとする奉仕団体としての性格が、大きな部分を占めている。そしてその奉仕は、クラブの所在地を中心とした地域社会に奉仕することを第一義としている。

しかし、ライオンズ・クラブが国際協会である以上、他のクラブとの合同アクティビティー(奉仕活動)によって、大きな奉仕をすることが望ましいのである。「へき地は告発する」に出てくる「ずずらん給食」こそ、まさに典型的な合同アクティビティーということが出来る。

それにくわえて、一つのアクティビティーが迎え水となって、さらに大きな成果を生むことはもつとも望ましいのだが、「ずずらん給食」の場合、佐藤首相を動かして予備費から五億円を支出、へき地校完全給食にふみきらしたという大きな成果をあげている。

その後、首相が岩手県にくるということをきいた現地の子らは、花巻空港に首相を迎え、感謝の

すずらんを贈呈するとともに、お礼の手紙を手渡したのだが、首相は記者会見の席でこの手紙を披露した。秘書がこの手紙を読み終わると、

「私も山口県に分教場で二部授業を受けて育った。僻地校での生徒や、教師の苦勞は、よくわかる」とポツリと語り、幼いころを思い出したのだろうか、首相は胸のポケットから白いハンカチをとりだすと、そつと目頭をおさえた。著者はこう語り、「僻地給食実施計画」がいかに適切な措置であつたかをくわしく解説するとともに、僻地および僻地校の実情を詳細に訴えている。

著者の前野和久君は、中堅記者というには少し早く、油ののつた若手記者という方がよからう。

この本は、その前野君が、ほんとうの若手記者として盛岡支局に在勤中、岩手県内の僻地を足まめに歩きまわり、取材した資料を分析し、研究、東京転勤後も機会あるごとに、へき地に出かけてえた豊富な資料をもとに、新聞記者らしい手法で、その実情を描写しているので、ひじょうに読みやすく、読んでいて飽きることを知らない。しかも、ことさらにその悲惨さを強調しようとしないうで、具体例をつぎからつぎへとあげていることが、かえつて読むものの胸を打つ。

さるにても、「日本のチベツト」といわれた岩手の僻地が、完全に解消されないで今日に及んでいることは、まことに遺憾である。GNP自由諸国第二位という経済大国として、これを見のぐすことはできないが、本書は、それを強く訴え、僻地解消への示唆に富む提案が随所に見られる。

また、「僻地の住民の福祉は、経済高度成長という大義名分の前には、完全に無視されつづけて

きた。つねに地域開発に先進と後進地域という二重構造をおきながら、政治を進めてきた政府の責任であろう」といいきっている。

私は、岩手県以外の多くの県が、過密と公害に悩んでいる際、過疎の僻地こそ、将来、開発の未来性をもった有力な土地であると思う。この意味において深刻なこの本の内容も、昔語りとして扱われる日一日も早くくることを信じ、かつ祈ってやまない。

上田 常隆

毎日新聞社最高顧問

ライオンズ国際協会302E複合地区

ガバナーズ協議会議長

まえがき

ふるさとの山に向ひて

詩ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

石川 啄木

まえがき

新聞記者になった私が、初めて赴任したのは岩手県の盛岡支局だった。昭和三十八年五月二十日の夕方のことである。ひとりさびしく降り立った東北本線、盛岡駅の駅前には、同県出身の薄幸の詩人、石川啄木が歌った、この歌を刻んだ石碑が立っていたのを、今なお鮮やかに覚えている。五月だというのに、そこから見る岩手山は、まだ雪の綿帽子をかぶり、おりからの夕日に桃色に染まって輝いていた。それから四年と十一カ月――。四十三年四月二十日の夜、東京本社社会部に転勤

になるまで、朝な夕な富士山に似た、この美しい岩手山を眺めて暮らしたのだが、横浜に生まれ育った都会っ子の私には、山と川のきれいな東北の町、盛岡での五年間は、実に貴重な歳月だった。

盛岡支局では、警察を回り、盛岡市政、教育関係、県政などいろいろな分野を担当して取材したが、その五年間、私の眼は、いつも岩手県の僻地に注がれていた。仕事のヒマをみて、ある時は集乳車に便乗させてもらって、またある時は雪上車に乗って、北上山地や奥羽山脈の山ひだのなかに点在する、開拓地の農家や僻地の分校を訪れて、僻地に生きる人々の声を聞こうと努めた。そしていちばん辺ぴな僻地のなかの僻地、僻地五級の六つの小中学校全部に足を運んだ。

そこで見聞きした僻地——それはわが国の政治の恥部だった。工業を中心に高度経済成長をはかってきたわが国の政策は、僻地を未開発のまま、おいてけぼりにして進んできていた。僻地は政治と経済の谷間だった。政府は過疎債や東北三法などを制定して開発のための手を打っているが過疎と過密の進み方は激しく、都市と僻地の格差は開く一方だ。昭和三十年以降、工業中心の都市が、政府の援助で目ざましい発展をしてきたのと引きかえに、農業を産業の基盤とする僻地は、政府の開発への援助がとぼしいため、貧しくなる一方だった。繁栄する都市の陰で僻地の住民は、そのシワ寄せを受けて泣いていた。

都会の子供たちが、教育ママの運転する自家用車でバレーのけい古だ、ピアノの練習だとかよっているときに、岩手の僻地の子供たちは、都内の高速道路工事などの出かせぎに出て行った父親に

かわって、母親を助けて畑仕事に精を出し、汗とほこりにまみれながら一家を支えていた。そしてそういう僻地の子供たちのなかには、お昼の弁当さえ学校へ持っていけない欠食児童たちがいたのである。いや、いまなおいるであろう。そういう子らを残して父親は出かせぎに出て、工場労働者になり、道路人夫となって都会の発展のために働いている。こういう矛盾した現実が、GNP自由世界第二位を誇る「日本列島」のなかにいま起きているのだ。

終戦後すでに二十数年も経ち、戦災でキズついた都市には、超高層ビルが建ちならび、政治家たちは「もはや戦後ではない。世界の大国、日本だ」と誇らかにいう。だがわが国の僻地には、まだ電灯のつかない家庭があり、欠食児童が飢えに泣き、病気になるても医療機関がなくて、診療を受けられないという地区があるのだ。まだ明治時代のような、いや「原始時代」のような政治に見放された地帯が、現実にはある。

しかし都市の繁栄に酔う人々は、政治家も、役人も、一般国民も、僻地のこの貧しい現実を残念なことに知らない。いや知っていても、改善しようと本気で努力する人は少ないようだ。繁栄する経済大国日本のはずかしい部分としてかくしてしまい、直視するのを避けて通ろうとしているようだ。それで私は盛岡支局に在任中は、できうる限り僻地に足を運んだのである。

この本に書いたのは、盛岡支局にいたとき、岩手の僻地を訪れて見たり、聞いたりした体験をまとめたものである。足で書いた僻地レポートといってもよいと思う。国民総生産は世界第二位という経

済大國日本——。そういうわが國のなかにも、こんな貧しい悲惨な現状があるということを知って考えていただければ幸いだと思う。

そういう僻地だが、ここはまた、アスファルトジャングルの都会ではもう失われた、人間の心と心の触れあうロマンの世界が残っているのである。僻地に当たいた欠食児たちに完全給食を実施することによって救済しようと、盛岡ライオンズクラブが中心になつて活動した「ずずらん給食物語」。また、悪条件にも負けないで僻地教育に情熱を燃やす「オカッパ先生」や「ボンボン先生」、音楽教育によつて僻地の児童の意識を改革するのに成功した「穀蔵鼓笛バンド」など、僻地には、心の暖まる話がたくさんあるのだ。僻地は、神経をすりへらす都会生活で失われた現代人の、心のふるさとだと思う。

しかし前にのべたように、政府がいきあたりばつたりに行なう行政や、地方開発のしわ寄せをうけて、僻地の住民の苦しみは、年ごとに深まるようだ。出かせぎなどによつて山村の過疎化は進み、都会との生活格差が開く一方のようだ。本書は、五年間にわたつて岩手の僻地を歩き、考えたひとりの新聞記者として、「政治と経済の谷間」である僻地からのルポであり、また私なりの僻地解消への二、三の提案も書いてみたいと思う。

この本で取り上げたのは、岩手の僻地の話だが、それはたまたま盛岡支局に赴任して行き、眼にしたから岩手のことを書いたのであつて、岩手のことを中傷しようなどという意図は毛頭ない。岩

手の僻地について書いてはいるが、青森でも秋田でも、全国の僻地になべて共通の問題といつてよいと思う。全国の僻地は同じように貧しいといえよう。

岩手の僻地に欠食児がいるということが問題になったとき、文部省はそれを契機に全国いつせいに欠食児調査を行なったことがある。すると青森県でも、また宮崎県でも、岩手県と同じように欠食児がいることが発見されたのである。それなのにだれも騒がず見て見ぬふりをしていたから、表面的には欠食児はいないと人々が思っていたに過ぎなかったのだ。だから岩手の僻地の特殊な話と考えないで、全国の僻地に共通なものとして、読んでいただきたいのである。

昭和四十五年十二月一日

前野 和久

